2010年7月号　　第520号

音楽の世界

目　次

論壇　ジョスランの子守歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・　助川 敏弥　2

特集　**政治・社会と文化**
＜歴史、社会、音楽＞
～日本の文化、音楽史からみた～・・　高橋　通　4
文化と民衆の力　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　夢音見太郎　10
文化シンポジウム「ハプスブルク帝国と音楽家たち」報告
中島　洋一　14

音楽時評　名曲秘話「真白き富士の根」　16　／ＴＶの音楽録音 20
東京の演奏会場　23

時評　世の中に正義満ちる？　3

連載
音・雑記ーひなの里通信ー (29)・・・・・・・・・・・・・・・・　狭間 壮　18
名曲喫茶の片隅から (10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本 英世　21
読 む 音 楽　詩になった名曲たち(29)・・・・・・・・・・・・　桐山 健一　24
音 盤 奇 譚 (15)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　板倉　重雄　26

エッセイ　遥かなる旅路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　滝澤 三枝子　28
レポート　「第５回 邦楽器とともに」に参加して・・・・・・　高橋　通　31
橘川　琢　33
CMDJ　会と会員の情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　35
（臨時総会）　37

論壇　　ジョスランの子守歌　　作曲　助川敏弥

通称「ジョスランの子守歌」、正式には、オペラ「ジョスランの子守歌」、原語では「Berceuse de Joslyn」。この曲は日本ではすでに明治時代から愛唱歌の中に入っている。多分、昔の女学校の教科の中にあり、当時学んだ世代から広まったのであろう。明治40年刊の「独唱名曲集」の中にすでに現在の近藤朔風の訳詞で収録されている。「むごきさだめ、身に天降りて」で始まる叙唱の部分がことのほか日本人の好みにあう。現代ではいささか古風だが、同音上の、語り風の出だしが、謡曲風、朗詠風、御詠歌風で、こんな所が日本人の情感に触れる。ちなみに、「身に天降りて」は、「溢りて」と私は聞いていた。しかし、どうも違うらしい。文献を探ると「天降りて」である。しかも、「あモりて」と読む。この言葉を私は知らなかった。あるいは私の読み違いだろうか。どなたか教示を頂きたい。いま出回っている楽譜では「あふりて」と仮名書きになっている。叙唱部は全曲繰り返しで二番まであり、歌唱部のみ同じ歌詞で繰り返される。この曲は通俗曲ではあるが専門的見地からも名曲である。

この曲は旋律だけでなく和音がよく出来ている。旋律に付随して実に巧みな和音運用が旋律を支えている。私が注目するのは、II度、VI度、和声学でいう副三和音が重用されることである。叙唱部の最後、「夢に忘れん、祈らばやゆらぐ星のもと」の部分と、最後の「マリアよ護りませ」の部分。ここがまた日本人の情感に触れる。実は、このII度、VI度の副三和音は「君が代」にも二カ所に出てくる。こんな所に日本人の隠された感性が現われているのではなかろうか。副三和音の荘厳さと感傷性を日本人は好むのだろう。「君が代」論争もこんな所まで広げるとおもしろい。歌詞の思想論と旋律論だけでなくはばひろい音楽理論の角度からの知見が加わってもいいのではなかろうか。国歌はほとんどの場合伴奏つきで聞くのだから、人の心にはこの和音が浸透していると私は思う。

ところでこの歌、オペラのどういう場面でどういう人が歌うのか。原作はフランスの文豪ラマルティーヌ(Alphonse Lamartine 1790-1869)の物語詩。フランス革命の頃、若き神学生ジョスランはアルプスの山中で瀕死の亡命者に会う。その男は幼い男児を同伴している。そして男児をジョスランに託して本人は死ぬ。ジョスランは遺児ローランスと洞窟で一夜を過ごす。この時にこの子守歌を歌う。従って原曲はテノールの歌である。子守歌を男声が歌うことは珍しい。「赤城の子守歌」くら

いしか思い当らない。この場面のあと、話はどうなるのか分らない。このオペラは1888年の作である。

最低音がEs、最高音がG、音域は10度で、オペラの歌としては狭い。愛唱歌とされたゆえんは歌い安いことにもあったのだろう。作曲者ゴダール（Benjamin-Louis-Godaard 1849-1895)はパリ生まれ、パリ音楽院を出た人で、ヴァイオリン奏者で指揮者であった。この歌以外はまったく知られないし演奏もされない。ヴァイオリン奏者であったからか、本人がヴァイオリン曲に編作しているし、チェロ曲にもなっている。巨匠カザルスの往年の録音が残っている。カザルスもまたこの曲の魅力を深く知り愛したのであろう。この演奏はまた、ひどく古風なもので、テンポもリズムも崩し放題、情緒纏綿たるものである。この曲が元来こういう表現を内包しているものであることが心底納得できる。

も一つ注目すべきは近藤朔風の詞。この人は1880年生、1915年没の兵庫出身の人。東京外語学校で学んだあと、東京音楽学校の選科で声楽の勉強もした。「ローレライ」「野薔薇」「夜の調べ」シューベルトの「子守歌」等々、日本の歌になりきった名訳を残した。この人に限らず、明治中期から後期の訳詞は翻訳調がなく日本語になりきった名訳を残した人が多い。津川主一、堀内敬三、緒園涼子、等々。

この歌について、この会の会報「エコー」に資料提供をもとめたところ、早速、声楽の内田暁子さんから資料が送られてきた。この文も内田さんの資料から始まった結果である。深謝。

（すけがわ・としや　本会　代表理事　作曲家）

時評　世の中に正義満ちる？

相撲界の賭博事件は大騒ぎ。もちろん良くない。野球賭博とはいうが、賭博の貸し借りが相撲の勝負の結果に及んだらどうなる。相撲の勝負が疑われる怖ろしいことになる。

それはそうなのだけど、いまの世の中、けしからんことをとがめるという時、国民全員か大部分が正義の代行者になり、これはこれで凄まじい。いささか不安が湧いてくる。「政治とカネ」の時もしかり。「人間一番容易なことは他人を責めること。一番難しいことは自分を知ること」。これはソクラテスの言。そんなに皆さん正しいことが好きなのか。カネで国が滅びたためしはないが「正義」で国が滅びたためしはある。社会を滅ぼすのも、国を滅ぼすのも「正義」である。

（つむじまがりＴＳ）

＜歴史、社会、音楽＞～日本の文化、音楽史からみた～

作曲　高橋　通

１、日本の歴史概説

A. J. トインビーが「行き止まり文化と文化の十字路」ということを述べている。イギリスのように大陸の端にある島国には、外からの文化は流入するが、出口が無く、その結果、古い文化が重層的に沈殿するが、アフガニスタンのような四方に開けたところでは、外来民族の流入によって、古い物は一掃されて、新しいものに置き換わるのだと言う。日本は、ユーラシア大陸の、イギリスとは反対側の東の端に浮かぶ島国であるので、トインビーの理論が当てはまれば、古い文化が幾重にも重なった文化を形作っていることになる。

日本の歴史を概観すれば、２つの全く違った時代が交代することで成り立ち、それが日本文化の基礎的な構造を構成している。非常に活発で躍動的な、ある意味では混沌とし、外からの影響を受けている時代と、正反対な、静的内的かつ芳醇な文化を醸し出す時代、この２つの交代で成り立っている。

平安時代以前の飛鳥天平の時代は、海外からの積極的な文化の収集期であり、仏教と言うその後の日本人の精神的な支柱を形成するのに欠かせないものが朝鮮半島や中国から流入してきた。音楽（この言葉の使い方や意味するものについては後述しなければならない）も、仏教と同時に流入してきた。平安時代になると、遣唐使の廃止によって、朝鮮中国等の外国からの公式の文物の輸入は途絶えた。当時の民間の技術力を考えると、対馬海峡を越えての漁民の交流などはあったが、文化全体に影響を与える程の量と質の輸入は途絶えた。すでに輸入されていた文字は、万葉仮名からは遥かに進んだ平仮名の文化が発生し（日本語の音韻も変化した）、音楽も日本人趣味に改変されて行った。

源平の時代になり平安貴族文化は衰退し、日本は混乱期を迎える。鎌倉室町戦国と乱世は続き、中国を代表とするアジアの国々だけでなく、ヨーロッパの国々も日本の周辺に出没し始め、鉄砲やキリスト教が流入した。キリスト教宣教師とともにその音楽も入ってきたが、限定的で、途絶えてしまった。音楽で重要なのは三味線の伝来である。これは、その後の日本音楽に大きな影響を残している。喫茶の元になる茶の流入もこの時期であるし、禅仏教もこの時期にもたらされた。戦国時代の日本と中国の間の交易は、未だ充分な研究がされていないようであるが、北九州や中国地方の戦国大名などを通じて、多くのものが日本に流入したと考えられる。二度の元寇もあった。ユーラシア大陸のかなりの部分に広がった大帝国であるモンゴルの中国部分は、元となり、大軍を率いて北九州に襲来したが、いろいろな要因が

重なって、日本本土は〜歴史的に他民族からの侵略を受ける可能性のあった唯一の危機的状況〜海外からの侵略を免れた。

戦国の乱世は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の３人によって収束し、最終的には徳川幕府が、日本全土を、幕藩体制という、二重構造を持った統治方式でその後２５０年もの間、支配する。この分割統治方式は、極めて巧妙であり、主な目的はキリスト教の流入阻止であったと思われる鎖国政策と相まって、世界に類を見ない、熟成した独自の文化を作り上げた。

現代の日本において、伝統的、日本的と思われるものの大半は、この時期の熟成によって形成された。残りの大半は、明治期以降に形成された。それ以前のものは、数は少ないが、日本人にとって基礎的な質を形作っている。

大政奉還、江戸時代の終焉、明治時代の開始。いわゆる幕末は、日本にとって、争乱の時代である。庶民は、黒船による外国の力を知ることになる。

そして、明治以降の日本が始まる。海外、特に西洋文明の取り込みが、日本の政治、社会を一変させる。文化は、そうは簡単に変化した訳ではない。庶民の音楽は、相変わらず、三味線音楽を中心とする伝統的音楽であり、いきなり西洋のオーケストラ音楽が、それまでの音楽に取って代わった訳ではない。

庶民の生活や習慣は急に変わることはない。武士政権が崩壊しても、民主主義に切り替わった訳ではない。選挙権にしろ、被選挙権にしろ、数十年をかけて、次第に変化して行った。６５年前に日本の敗戦によって終結した世界規模の戦争を経て、現代に至っている。

２、平安期までの音楽文化史的概説

人類は、多分、かなり初期から歌うことを知っていたであろう。言葉の使用と比べてどちらが早かったのか、興味がある。

古墳時代の琴のような弦楽器が見つかっている。４〜５本の絃をもった撥弦楽器と思われ、忠実に再現した楽器が作られている。太鼓のような打楽器や笛の類いも、古い時代から存在していた。古事記や万葉集に記述される事柄が、真実かどうかの問題はあるにせよ、弓弦を鳴らして邪気を追い払う、手を叩いて歌を歌うなどが行われていた。

中国や朝鮮から音楽が渡来する以前にも日本古来の音楽があった。一般に和琴と呼ばれている弦楽器は、現在でも雅楽の中の倭舞や神楽で、演奏されている。

奈良時代には、近隣の外国から多くの文物が渡来した。当時の大国である中国の唐ばかりでなく、北方の渤海からも音楽が伝わった。朝鮮や中国から伝わったものでも、朝鮮半島の高句麗や中国の音楽ばかりではなく、中国化はされていたかもしれないが、ベトナムやインドの音楽、西域の音楽も流入した。日本が島国であることが大きな要因となって、人や物が継続的に民間レベルで流入することはなく、遣

隋使、遣唐使といった国家レベルでの文化輸入であった。

民間の音楽は、多分、祭りや豊作祈願などに付随したものであったであろうし、歌は民謡の原点と言うべき仕事歌の様なものであったであろう。公的な役所として、楽人の養成や雅楽の演奏部署もあった。当初は、外来音楽を演奏することが主たる目的であったが、平安期になると自前の音楽も出てくる。楽制の改革によって、日本人の好みに合わない楽器は排除された。平安時代の末期になると、貴族の没落によって、雅楽が地方に流出した。越天楽のような親しみやすい曲の旋律は、歌詞が当てはめられ歌われることになった。平安期の民衆の音楽についての詳細は分からないが、その前の時代と変わらず、祭りや儀式に伴うものであったと思われる。また、仏教の広がりとともに、宗教的な音楽も次第に行われるようになった。

３、琵琶音楽について

比較的目にする楽器、耳にする機会の多い音楽である、琵琶（楽）について、触れておく必要がある。武満のノヴェンバー・ステップス以来、海外からは日本の代表的な楽器であるような印象を持たれている琵琶（楽）は、奈良時代～平安時代あたりに日本に持ち込まれ、その後も現在まで脈々と受け継がれている音楽であることは、意外に知られていない。

琵琶音楽には大きく二つの流れがある。一つは、雅楽に用いられている楽琵琶、もう一方は盲僧琵琶という宗教的な音楽の系統である。この二つの系統が存在し、その後の日本音楽の展開に大きな影響を与えていることは忘れられがちである。楽琵琶と盲僧琵琶は、その後の日本音楽の重要な分岐となる、歌いもの音楽と、語り物音楽の二つの流れを生み出す。

琵琶楽の中から、代表的な中世芸能である平曲（平家物語を琵琶の伴奏で語る音楽）が出てくる。室町期に動き出した当道職屋敷（当道座）という盲人統括組織の中で、初期には平曲が必須の芸として扱われて行くことになった。この当道制度では、平曲はもちろん、三曲（箏、三絃、胡弓）は盲人の専業としての独占権を持っていた。

４、中世の音楽と社会

平安貴族は、平清盛の台頭に始まる源平の争乱によって、没落し、多くの貴族文化は、京都から離れた地に拡散した。雅楽は、地方の寺社によって維持され、九州久留米の善導寺は特に知られた存在である。京都の貴族の生活も、庶民との交流が起き盛んになり、後白河法王は、梁塵秘抄で知られるように、当時の民衆音楽（といっても、遊女などの遊興の音楽）を習い、収集し、記録した。この時期は、貴族の音楽である雅楽が、民間に流出したが、反対に、民間の音楽が貴族にも入り込んだ。

雅楽が民間に流出したといっても、雅楽そのものは、楽器の問題や演奏技術の問題もあり、一般民衆がそのまま雅楽を演奏するようになった訳ではない。雅楽の旋律が民間に伝わり、特に越天楽のような親しみやすい旋律は庶民にも好まれ、越天楽歌い物と呼ばれるような､越天楽の旋律に歌詞を当てはめて歌う流行歌である｢今様」が広がってくる。今も歌われている「黒田節」はその一例である。平安貴族の時代にも、オーケストラ的な雅楽の他に、琵琶の音楽や箏の音楽、笛の音楽もあったが、貴族が都落ちした後は、各地でこのような音楽も奏されていた。特に、箏は演奏法の改良によって、独自の発展を遂げることになった。

江戸時代の始まる直前に、三味線が堺に伝来したと言われている。その三味線を、最初に手にしたのは、琵琶法師だったとも言われている。この辺りの詳細な事情は他の専門書にゆずるが、短期間に日本風に改変が行われた。その理由は、楽器の音が人々の心を惹き付けたこと。当時の日本人、特に堺の町は貿易商業自由都市であったことで、自由闊達、権力者に屈服しない気風、貿易都市として外国のものに寛容であった。これらが外来楽器であった三味線を受け入れる下地になった。中国の三弦は、共鳴胴には蛇の皮が張られていたが、日本ではそれに適した蛇がいなかったことから、ネコや犬の皮が代用されることになった。同属の琵琶を演奏していた琵琶法師が三味線を手にしたことはうなずける。三弦は、義爪（いわゆるピックのようなもの）を使って演奏するが、琵琶は、大きな撥で演奏する。琵琶法師には撥の方が手慣れていたであろう。しかも胴に張られたのは丈夫なネコの皮。琵琶のような撥で弾くことが可能であった。

琵琶の音は繊細であるが、三味線のようなダイナミックな響きには乏しい。三味線は、当時の人形芝居と結びついて語り物音楽の方面への発展を遂げ、一方では三味線伴奏の歌謡種目が生まれ、地歌へと発展してゆく。

５、近世、江戸時代の社会と音楽

江戸時代は、現代日本人の現代の日本人の気質形成に重要な役割を果たしている。今、私たちが、日本的なもの、日本文化の代表のよう感じているものの多くは、江戸時代、それも中期以降に始まったものである。食べ物を例にとれば、日本食の代表のように思われているにぎり寿司や天婦羅、そば、うなぎ、醤油、清酒などは、江戸時代にできあがったものである。懐石料理も、江戸時代のものである。音楽で言えば、邦楽と総称されるものの大半を占める三味線音楽は、三味線の日本伝来が永禄の頃（１５６０年代）であることから、江戸時代に出来上がったことが分かる。箏曲も楽器のルーツは雅楽にあるので古いが、八橋検校によって俗箏となったのは１７世紀中頃のことである。

約２５０年と言う長い年月の間江戸時代が続き、文化が熟成した理由は何であろうか。

第一に、地理的要因があげられる。日本は島国である。また、その位置も、中国や朝鮮には近いものの、当時の文化科学の先進地域であった西欧からは、遠く離れた地域にあったこと。外からの影響を受けにくい中国朝鮮半島の状況があった。

第二に、江戸幕府の支配体制。国民に対しては、士農工商の身分制度に加えて、人、特に百姓を土地から切り離さない政策、支配者の武士階級については、幕藩体制という、分割統治方式。交通の未発達もあって、全国規模の文化と言うより、地域地域に夫々の文化が育った。

第三に、商業の発展、経済の進歩である。文化発展の中心地であった、京阪を核とする上方と江戸の経済的な発展が、文化の進行を促した。しかも、上方と江戸では、その色合いが違った。初期では、圧倒的に上方文化が優勢で、江戸は田舎であった。この関係が対等になるのは、幕末になってからであろう。支配者階級の文化は別として、庶民を含んだ文化芸術は、経済的な裏付けが無ければ育たない。

第四に、日本人の基本的な性向。勤勉で、素直な性格。決められた枠の中で、工夫し努力するという気質。人民は、基本的に、飢えなければ、また、極端な締め付けが無ければ、現状維持を好む傾向にある。

このような要因によって、文化は独特な熟成を見せた。種目によって行われる地域、階級が分かれていたこと。外からの影響がほとんどない状態での発展は、内向的である一方、緻密で繊細さを持っている。数学では、単純な繰り返しを丹念に行うことによって、複雑高度な計算を行う和算は、公理や定理で合理的に解答を得る西洋数学に匹敵するようなレベルに達した。楽器では、いろいろな工夫が試みられ、現代の発明であるかのように言われている多絃箏さえ試みられている。

今まで、「音楽」という言葉を、無造作に使ってきたが、日本において「音楽」は＜うたまい＞と呼ばれたり、雅楽のうちの外来の管弦を指したり、歌舞伎の陰囃子のあるものを呼ぶ言葉で、声を伴わない器楽合奏に限定的に使われた。現代のように、歌謡、器楽合奏、雅楽、三味線音楽、民謡等を総称する概念ははっきりしていなかった。あるものは、単に種目名で呼ばれたり、他の芸と一緒にして遊芸と一括されたり、音曲と呼ばれるものもあった。

音楽は種目毎にその担い手が異なっていた。例えば＜能＞は武家の公式の音楽であり、保護を受けていた。雅楽は宮中を中心とする公家社会のものであり、三味線音楽を中心とする音曲は庶民の手にあった。庶民は、＜能＞を見聞きする機会はほとんどなく、雅楽を耳にすることも無かった。三味線音楽も細分割されて、夫々のテリトリーが決まっていた。音曲の多くは、吉原のような遊里で発展し、あるいは歌舞伎等の芝居音楽として発展した。江戸時代も末期になると、庶民の経済力が大きくなり、富裕層では、武家の音楽であるべき謡を習うものも出てくる一方、武士が常磐津清元等の音曲に親しむようになってくる。雅楽はその基礎となった階層が特殊であったため、民間には流出しにくかった。幕末に、京都の吉沢検校が、雅楽

の音階を取り入れた古今組を作曲したが、雅楽の知識習得にはかなり苦労したと言われている。

６、明治維新から現代まで

最後に、明治維新以降について概説する。

幕末は、政治的にも文化的にも混乱期であった。尊王攘夷、王政復古などが叫ばれ、西洋の進んだ文物が入ってくるようになると、革新的な動きが出てくる一方で、復古的な文化が台頭してくる。箏曲では、復古的な動きが起こり、地歌という三味線音楽に隷属したような状態の箏の音楽から、八橋の時代のような三味線を伴わない音楽が出現し始める。その中には、先に触れたような雅楽の影響を受けたものが出てきた。

江戸幕府の崩壊と明治維新の影響を受けたジャンルもあった。幕府の保護下にあった能楽や、当道職屋敷の支配下にあった座頭芸能は、保護者を失い、生活に窮するものも出たと言う。その一方で、歌舞伎芝居と結びついていた町人の音楽であった三味線音楽は比較的影響が小さかった。幕末に中国から流入した明清楽は一時的に流行した。

明治政府の西欧化政策の一環として積極的に輸入されたヨーロッパ音楽は、支配者階級の音楽であって、急速に社会に浸透することはなかった。江戸時代に定着した社会階層と音楽の関係はその後も日本社会に存続し、西洋クラシック音楽は一部の上層階級の音楽となり、民衆の音楽とは切り離されて推移することになった。太平洋戦争の敗戦によって到来した、自由平等を標榜する社会形体が推進され、上層階級の文化に対する意識や財力が低下してくると、クラシック音楽を保護することが困難になり、国家レベルの芸術振興策によって辛うじてその維持が可能になっている。他方、一般経済の発展に伴い、庶民の財力が向上すると、その階層に支えられた演歌やポピュラー音楽といった大衆音楽がますます勢力を伸ばしている。この傾向に、ラジオ、テレビのマスコミが拍車をかけ、ラジオ、テレビの放送は、ごく一部を除いて、クラシック音楽が放送されることは無い。

一応、日本の歴史と社会、音楽の関わりを概説したが、ほんの一部について触れたに過ぎない。不思議なことに、今の日本の教育では、日本の文化史、特に音楽史については、ほとんど教えられていない。多くの音楽家は、西洋音楽史については熟知しているが、日本の伝統音楽について、例えば長唄は歌ものの系譜に属し、浄瑠璃系統に入る清元や常磐津とは全くの別種の音楽であることすら知らないものが多い。中学の音楽テストでDebussyをドビッシーと書けば不正解になるような馬鹿げた教育が行われているのが実情である。自国の音楽史、文化史に疎い読者のために、多少の知ったかぶりをお許し願いたい。

（たかはし・とおる　　本会作曲会員）

文化と民衆の力　　夢音見太郎

この文は、ここに掲載される筈がなかったものだが、怠け者で人心把握の下手な編集長が、ある人物に原稿依頼したものの執筆を拒否され、さらに代わりの執筆者を捜して依頼したものの、その人物にも執筆をするための十分な時間がないという理由で断られ、私に執筆をせがんで来たので、長年のつきあいもあり、書くことにしたのじゃ。それならば、民衆の力が文化現象にどのように影響を及ぼすかということを、やぶにらみの視点から、書いてみようと思う。

東西の文化の比較

私は若い頃は日本史の方が好きだったのだが、年を取ったこの頃になって、世界史を知らないことには、日本史を深く知ることが難しいではないかという気がしてきたのじゃ。しかし、今回はそんな難しい話しではなく、民の力が時々の文化にどのような影響を与えたかについて、好き勝手に述べてみたいと思う。

国によって時間的ズレはあるものの、洋の東西を問わず、１７世紀～１９世紀は、市民層が次第に力をつけ、文化の担い手になって行く時代であろう。例えば、肖像画は、もともと王侯貴族の個人や家族を描くものだったが、17 世紀のオランダでは集団肖像画が盛んに描かれるようになる。レンブラントの『夜警』などは、その種の傑作であろう。その絵のオーナーも描かれたモデルも複数の市民である。17 世紀のオランダでは、他国に先駆けて市民社会が到来し、市民が文化の担い手になって行ったのじゃ。画家への報酬も「ダッチカウント（オランダ人の勘定法）」、つまり、描かれた市民達が割勘で支払ったことじゃろう。

我が国に話しを移すと、南画（文人画）や禅画は武士階級のものだろうが、浮世絵などは市民（町人）が、育んだものであろう。江戸初期の菱川師宣などは肉筆画を描いたが、やがて需要の拡大を踏まえ、浮世絵版画として発展して行き、鈴木春信、喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重などの優れた画家を生み出し、多色刷りの技術も大幅に向上して行く。

次にオペラと歌舞伎を比べてみよう。その発祥、発展の経緯も異なり、また内容的にも音楽のウェイトが非常に大きい西洋のオペラと、芝居、舞踊のウェイトが大きい歌舞伎では少し異なるが、生まれた時期、それを支え育んだ層において共通点が見られる。どちらも、富裕な市民（町人）たちが、スポンサーの中心だったのであろうが、それほど金持ちではない一般庶民を締め出していた訳ではない。例えばミラノのスカラ座の「天井桟敷」、歌舞伎の幕見席（大向う）など、安い席もあり、そこに通の常連客が集まり、役者の名演技に対して、「成田屋！」、「成駒屋！」などと賞賛の声をかけていたのじゃ。

江戸時代の町人達は、俳諧を源とする「川柳」、清元、都々逸、などの音曲、天麩

羅、寿司などの料理、様々なジャンルにおいて多彩な町人文化を生み出すのじゃ。
　文字の読書きが出来ることを「識字」というが、江戸時代末期の日本人の識字率は 65%に達しており、同時代の西洋先進国の識字率より、ずっと高かったのじゃ。私が子供の頃は「江戸時代」は封建時代で、文明が停滞した時代と教わったが、それはある面ではかなり違っており、町人の文化が大きく育ち成熟した時代だったのじゃよ。260 年もの間、戦争がない平和な時代が続いた国は西洋にはなかったしね。
　ところで、私がオランダに滞在していた頃、鈴木春信の浮世絵版画集をオランダの友人に見せたら、彼は大いに興味を持ち、じっくり家で観たいと言って借りて帰って行った。数週間後、借りた本を返す時、彼は「ほんのりとセクシーでとても素敵な絵だが、どこか、ひ弱な感じがずる」と、感想を述べた。画家の個性にもよるが、確かにオランダの集団肖像画に描かれた人々は、自信満々で堂々としている。そこで、私は「17～18 世紀のオランダの市民達は、自分達が中心になって政治を行うことが出来たが、江戸の町人たちは、支配階級である武士階層を凌ぐほどの経済力を持ちながらも、政治権力は持っていなかった。そういうことが、そことなく絵に表れているのかもしれない」と説明したのだった。その説明が当たっているかどうかは、私にもよく判らないのじゃが。

オーケストラの編成、楽器の変遷について

　私が学生の頃の話しじゃが、NHK ラジオでその週のコンサートを批評する番組があり、今では珍しくないが、当時はまだ珍しかったチェンバロのコンサート（多分、東京文化会館の大ホールで行われたものであろう）を批評していた野村光一、山根銀次といった音楽批評家のお歴々が、「それにしても小さな音だね。これじゃピアノにその座を奪われる筈だ。」などと語り合っていたことを憶えている。ピアノはイタリア語の“クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ”（弱い音と強い音が出せるチェンバロ）の名称通り、大きな強弱の変化を再現出来ることが売りであった。鳥の羽軸で弦を引っ掻いて音を出す、チェンバロと、ハンマーで弦を叩いて音を出すピアノでは、発音方式からして、強弱表現という面では、後者が圧倒的に有利だったのじゃ。ピアノはどんどん改良されて行き、１９世紀の後半にはほぼ完成の域に達し、大きなホールでも聴き手の耳を満足させるだけの表現力を獲得して行く。もう少し早い時代に起こった絃楽器におけるビオラ・ダ・ガンバ属の楽器から、ヴァイオリン属の楽器への交替も、よりよく響くヴァイオリン属の楽器が好まれるようになって来たからじゃろう。
　また、オーケストラの編成の編成規模も、時代によって変化して行く、モーツァルトや、ハイドンの初期～中期の時代では、交響曲といえども 20 人かそれを少し上回る程度の編成だったが、時代が進むとともに大規模になり、ベートーヴェンの時代になると二管編成が定着し、ホルンは四本使われるようになる。つまり、５０～６０人程度の編成に膨らむのじゃ。

それは、音楽演奏の場が、次第に王侯、貴族の館のサロンから、市民達もチケットを買って聴くことが出来る広いコンサートホールに移っていったからじゃよ。

また、ハイドンなど古典時代に活躍した作曲家のスコアを見てご覧、第二ヴァイオリンやヴィオラのパートが、殆ど第一次ポジションでひけてしまうほど、やさしく書かれてあることに気づくはずだ。貴族たちの中には下手な横好きで、演奏の仲間に入りたがるような者が結構いたので、そういう貴族たちへのサービス心から、易しく書いたのじゃよ。しかし、演奏したがるような音楽的意欲のある貴族は、作曲家からみて疎ましい存在ではなかっただろう。しかし、中には無教養で無粋な人間と思われるのが嫌で、しぶしぶとコンサートに付き合い、途中で居眠りしてしまうような貴族もいたことだろう。ハイドンの『びっくり交響曲』などは、そういう族（やから）を驚かしてやれ、という意地悪な魂胆があって書いたものではないかと想像する。第二楽章の突然の ff に驚く貴族たちを尻目に、「してやったり」とニンマリするハイドンの表情が目に浮かぶようじゃ。

ところで 19 世紀は、産業革命を通して富裕な市民層が育って行った時代でもあったが、ピアノだけでなく様々な楽器が生み出され、改良されて行った。例えば木管楽器のキーシステムの改良（ベーム式など）、金管楽器のバルブによる菅の長さの切り替えなどがそうだ。ベートーヴェンの第九交響曲の第三楽章で、四番ホルンだけが難しいソロを演奏する。その理由は四番奏者だけが、バルブで菅の長さを切り替え様々な音程で演奏できる新式のホルンを持っていたからなのじゃ。もっとも今では、そのパートは殆どの場合、第一奏者が演奏しているがね。

器楽や、声楽の演奏技術もどんどん高度化して行く。ヴィルトゥオーソの時代の到来だ。音楽マニアたちが演奏家に名人芸を求めたということも原因であろうが、作曲者や演奏者の側も自己の芸術の表現力の拡大を求め、難しい音符を書いたり、演奏したりしたのじゃよ。ハイドンの初期の時代には易しかったオーケストラのヴィオラのパートも、ベルリオーズやワグナーの時代になると、ずっと難しくなる。優れた指揮者でもあったベルリオーズは、自分の作品を指揮していて、ヴィオラ奏者がちゃんとひけないと言って、しょっちゅうボヤいていたようだ。

市民の時代到来とその後

市民達が次第に力をつけ、文化の担い手になって行く話しをして来たのじゃが、市民勢力の台頭が、民衆に幸せだけをもたらした訳ではない。それが様々な悲劇も生むのじゃよ。少し政治の話しをすると、フランス革命は、フランス、ウィーンの歴史のみならず、全ヨーロッパを巻き込んで行く。自由、平等、博愛の理念が掲げられたのだが、利害の衝突、合い続く権力闘争により、多くの血が流されることになる。「博愛」が、「迫害」に変わってしまうのだ。

市民勢力といっても、高い教育を受け財力を持つ、ブルジョワから、その日のパンにもこと欠くようなプロレタリアートまで、様々な階層の人達がおり、それらの

人々がそれぞれ自分達の権利を主張し、対立し、抗争を繰り返してしまったからだ。安定した市民社会を築くまでには,多くの犠牲と長い時間が必要だったのじゃ。

また、ヨーロッパはさほど広くない土地に、様々な民族が入り乱れて生活している。ハプスブルグ帝国などは、もともと典型的な多民族国家である。市民の権利拡大の要求と民族の自決権獲得の要求は、重なって進行して行く。フランツ・ヨーゼフ一世なども、はじめは、各領地で起こった民族自決運動を弾圧するが、やがて、自治権を認めざるをえなくなって行く。市民の力が強くなる中で、支配者達は、いかに市民の力を引き出し、国を富ませ市民達に満足を与えて行き、その一方でいかに市民の力をコントロールし安定した支配を続けるか、大いに腐心するのじゃ。しかし、民族の自決権を獲得した国は、民族間の対立といった新たな問題を抱えることになる。こうした問題は現代まで続いている。例えばユーゴスラビアはソ連崩壊によりその支配から解放されるが、クロアチア人・ボシュニャク人と、クロアチア人の間で、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が起こり、多くの犠牲者を出してしまった。いまは、国内にクロアチア人・ボシュニャク人によるボスニア・ヘルツェゴビナ連邦とセルビア人によるスルプスカ共和国を並立させることで、なんとか安定を保っているがね。しかしその一方、かつて戦争を繰り返して来たヨーロッパ諸国は、ＥＵ（欧州連合）という形のもと、経済面、政治面において、まとまりを見せて行く。

再び文化に話しを戻そう。19 世紀になり、多くの市民達が、コンサートホールや、オペラハウスで音楽を楽しむようになった。しかし、それを享受出来たのは、ある程度経済的に豊かな市民層であろう。現代は先進国においては、国民のすべてが、文化を享受出来るようになった。大衆文化時代の到来である。ポップスの野外コンサートなどは、スピーカやアンプを積み木のように重ね、集まった数万人の人々に大音響を届けるようになった。

そのような時代に、主にクラシック音楽を中心に活動している我々は、いかにしたら良いのであろうか？それは、我々一人一人が常々考え続けて行かなければならない問題だが、自分自身も大きくみれば大衆文化を構成する一員であることは忘れてはいけないのではなかろうか。と同時に、大衆というものを一様で画一的に捉える必要はない。歌舞伎や、能楽のような古典芸術もむしろ、今の方が一昔前より盛んになって来ているし、オペラや、クラシック音楽の愛好者も依然として多く存在するのだ。自分が美しいと思っているものを、全力をもって人々に伝える努力を続けなければならないだろう。しかし、人は様々だから、みんなに判ってもらう必要はなかろう。我々が熱い情熱を持って活動する限り、伝わる人には伝わることを信じて活動しつづければ、よいと思うのじゃが、如何だろうか。

（ゆめおと・みたろう　　音楽戯評）

文化シンポジウム『近代西洋史と音楽家たち』

第１回「ハプスブルク帝国と音楽家たち」　報告：実行委員長　中島 洋一

５月 16 日（日）午後１時より、新宿文化センター和会議室において本会初の文化シンポジウムとなる『近代西洋史と音楽家たち』第１回「ハプスブルク帝国と音楽家たち」が、西洋文化史の研究者で、ハプスブルク帝国の歴史と文化に造詣の深い小宮正安氏をメイン・パネラーに迎え、開催された。パネラーは他に、助川敏弥（作曲）、北川暁子、深沢亮子（ピアニスト）、松岡新一郎（美術史＆表象文化論）の面々、その他本会会員の参加者が６名、一般参加者が２名で、司会は私が担当した。

視覚資料については、小宮氏のパソコンからプロジェクターに送信しスクリーンに映写するという、大学の講義や学会発表などで一般的に使われる方式で公開されたが、小宮氏持参のデータが豊富で、なかなか効果的だった。印刷資料については、小宮氏が作成した目次をもとに、筆者が簡略な歴史年表、王家系譜図などを作成し、音の資料は、小宮氏と筆者が持ち寄ったＣＤやＭＤを使用した。当日の印刷資料の第１ページを飾った小宮氏作成の目次の項目は以下の通りである。

① **多民族・多言語国家の秘密**／・ウィーン・フィルの特殊性・世界支配と宮廷楽団・バロックの輝きと音楽

② **「宮廷音楽家」列伝**／・ウィーン古典派と宮廷との距離・神聖ローマ帝国の解体と宮廷楽団　・宮廷舞踏会音楽監督への憧れ

③ **音楽の都ウィーンの誕生**／・都市大改造と地図の見方　・普墺のもたらしたもの・ユダヤ人のジークフリートと博覧会

つまり、膨大なウィーンハプスブルク帝国の歴史と文化を三つの時期に分け、一日で語り討論しようという計画で、それぞれの時代区分毎に最初にメイン・パネラーが概説し、その後、パネラーや一般参加者に意見を求め、質疑応答するという方式をとった。

第一期については、まず小宮氏より中世においては一地方領主に過ぎなかったハプスブルク家が、神聖ローマ皇帝となり、やがてその地位を世襲するようになること。15 世紀末のマキシミリアン１世の時代になると、婚姻政策などで領土を拡大し、勢力を広げ、宮廷楽団がおかれるようになったこと。そして、その後のバロック時代までの、帝国の歴史と、宮廷を中心とした音楽文化の展開についての概説があり、その後、質疑応答に入った。パネラーでピアニストの深沢亮子氏から、スペイン系

ハプスブルク家が途絶えた理由について、その他、他の参加者からもいくつかの質問が出された。

第二期は、マリア・テレジアの時代から、フランス革命の影響を受ける時代、そして、ウィーン会議後の宰相メッテルニヒが政治を牛耳っていた王政復古の時代まで、一気に駆け抜けた。ベートーヴェンの時代にさしかかったところで、神聖ローマ皇帝レオポルト 2 世の末子でベートーヴェンの弟子であり、パトロンだった、ルドルフ大公の最晩年の作品「七重奏曲」の第一楽章が再生された。この初期ロマン派を連想させる表現力のある作品は、王家の人間の趣味の域を超えたものだったが、この作品再生後、支配層と芸術の問題について、パネラーから様々な意見や質問が飛びだし、ルイ 14 世とダンスの問題まで発展した。そのような展開は、メイン・パネラー自身にも、司会者にも、なかなか事前に予測がつかないものだったが、ディスカッションの内容自体はより興味深いものとなった。しかし、そこでかなりの時間を費やしたため、「**③音楽の都ウィーンの誕生**」　に括られる、フランツ・ヨーゼフ統治時代のウィーンの文化については、その時期の前半について小宮氏が概説したのみで、時間切れとなってしまった。

シンポジウム終了後、近くの飲食店で軽い食事をとりながら、メイン・パネラーの小宮正安氏を他のパネラーや参加者で囲み、楽しく語り合った。小宮氏は各自の質問に対して丁寧に答えていたが、そこに集まった人達のこの催に対する評価は高く、また続けて欲しいという要望が強かった。もちろん、企画者の私も、このシリーズは継続するつもりである。

しかし、今後この催をより発展させるため、気がついたいくつかの課題を挙げてみたいと思う。

まず、ハプスブルク帝国の歴史と文化全体について、たった 4 時間で解き明かすことは、かなり無理だったといえよう。もっと、時期、または内容を絞らないと散漫になってしまいやすい。

この催を、有識者のみを対象とした知的なサロン的性格のものとするか、一般の人でも気楽に参加出来るセミナー的性格のものとするかである。企画者の私は、両方の要素を包含した催にしたいという願望があった。しかし、高い専門的知識を持つパネラーの人たちが発言すると、一般参加の人たちは、なかなか発言しにくくなるようだ。休憩時間に、司会者の私に対して「この時代、民衆は文化の形成について、どのように関わっていたのでしょうか」という、質問をした人がいた。　しかし、そのような質問を、ディスカッション中に、メイン・パネラーに対して質問して欲しいと思った。

一般参加者から素朴な質問や意見を引き出せなかったのは、司会者の私が至らな

かったことにも一因があろうが、取り組んだテーマが大きすぎ、それを消化するための時間が不足したことが最大の原因であったと考える。

例えば、「ベートーヴェンの音楽と彼が生きた時代」、「フランツ・ヨーゼフ一世の統治時代とウィーンの文化」、などというように、テーマを絞り、そのテーマに基づき、音楽、歴史学、文化史、社会学、その時代に生きた人々の人間模様など、様々な角度から問題を捉え、質疑応答を繰り広げながらテーマを発展させて行く方法もとれるのではなかろうか。問題を捉える角度が多様であれば、様々な参加者の知的好奇心を満たすことが出来るとともに、意外な新しい発見がもたらされるかもしれないと考えるのである。

今回のような研究シンポジウムの開催は、参加者を増やす工夫をしないと、チラシ作成代などの宣伝費や、会場費などが重なり、赤字決算になってしまう。しかし、もともと大きな費用を必要とする催ではないので、団体の財政を揺るがすような赤字にはならない。

従って、試行錯誤を繰り返しながらでも、この催は是非継続して行きたいと考えている。我々が生きている今の時代は、過去の歴史の積み重ねの上にある。従って、過去を知ることは、今を知ることに繋がると考えるからである。

最後に、快くメイン・パネラーを引き受けて下さった小宮正安氏、パネラーおよび一般参加者のみなさん、録音、会場のセティングなどお手伝いいただいた、会の方々に、感謝するとともに、引き続いての協力をお願いして、この拙い報告文を閉じることとする。

（なかじま・よういち　本誌　編集長）

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

音楽時評　名曲秘話「真白き富士の根」

「真白き富士の根」、有名な愛唱歌である。明治４３年逗子開成学園（中学）の生徒１２人が乗ったボートが江の島、七里ヶ浜沖で転覆、１２人全員が死亡するという事件があった。これだけの大量遭難死は事故が多い現代でもめずらしい。

真白き富士の根　緑の江の島
仰ぎ見る目もいまは涙
帰らぬ十二の雄々しき御魂に
捧げまつる胸と心

この歌でこの事件はひろく知られた。事件は当然ながら社会に大衝撃を与えた。当時、鎌倉女学校の音楽教師であった三角錫子（みすみ・すずこ）という人が、この詩を造り、賛美歌の旋律に乗せてこの歌が出来た。ここまでは美談であり哀話である。しかし宮内寒弥という小説家が「七里ヶ浜」という小説を書いてその中でこの歌と事件について今まで知られなかった背後事情を知らせた。

当時、宮内の父親は開成学園の舎監であった。ボートは舎監の許可がなければ漕ぎ出せないことになっていた。事件のあった日は日曜日で、舎監は友人見送りのため鎌倉へ出かけ一時間ほど逗子を留守にした。この間にあの事件が起きた。生徒たちは当然受けるべき舎監の許可を受けず無許可で漕ぎ出した。それだけではない。稲村ケ崎に上陸して中学生のくせに飲酒、酒盛りをしていた。その後遭難した。生徒の方に問題があったにもかかわらず、世間は舎監に非難の目を向けた。舎監は、音楽教師の三角に好意を持っていた。しかし、三角も口もきかなくなった。逗子にいられなくなった舎監は逗子を去り放浪の旅に出た。ところが、あとで分ったことだが、三角錫子という人は子供が出来ない体質の人であった。父は別の人と結婚して「私」が生まれた。だから、あの事件がなければ父親は三角と結婚し、自分は生まれなかったことになる。現在、この世にあることはあの事件のおかげということになる。

音楽現代

7月号　定価840円

♪特集「火の鳥」初演100年記念
「ストラヴィンスキー」～３大バレエ音楽を中心に
♪特別企画　生誕100年記念
追悼 ジュリエッタ・シミオナートと
往年の名歌手
♪特別記事
重要文化財になった貴志康一の生家
♪カラー口絵
ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン
「熱狂の日」音楽祭 2010
～東京・金沢・びわ湖
♪連載 ショパン生誕200年記念
「ショパンのポーランド」 第４回
♪インタビュー
鶴我裕子、樋口達哉、根本昌明
マシュー・アーレン、小山裕幾他

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11
TOMYビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

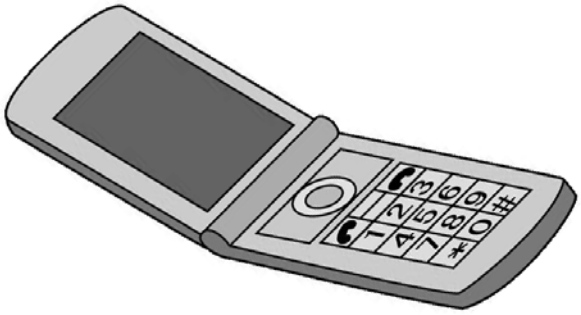
この小説は１９７８年に雑誌「新潮」に発表された。いまに至るまで反論異説も出ないから多分本当なのだろう。既存の賛美歌の旋律に乗せたというが、もとの賛美歌もどれであるか諸説ありはっきりしないらしい。「富士の根」の「根」は「嶺」と読みたくなるが「根」が正しいそうだ。富士山の麓に江の島がある、という意味である。　　（浜）

連載　**音・雑記－ひなの里通信**（29）　狭間 壮

140 字で日本が変わるか　　ツイッターという「つぶやき」の世界

「それは携帯電話ですか？」「いいえちがいます。これは携帯電話ではありません」「それでは、それは何ですか？」「これは、ケータイです」「？？？」。

言葉を正確に、と話せば、ジャック and ベティー状態になってしまう。今、世の中に出まわっているものは、ケータイであって、携帯電話ではないと言う。今やいろいろな機能でレベルアップされて、電話なんてもう古い、と笑われてしまうのだ。ケータイを持たない私など、その機能の説明を聞いていると、同時代に暮しながらの浦島太郎状態である。



そして、さらに「ツイッター」なる機能がついた。週刊誌が、「ツイッターが日本を変える」などと特集して煽りたてる。「日本を変える」なんて、これは一大事ではないか。ホワット is ツイッター？と書店に走る。関連書籍は多数あった。目にとまらずにいたのは、私の無関心ゆえのことだったのだ。

一冊を手にとり、拾い読みすると、ツイッターとは簡易型ブログサービス機能とある。文字数 140 字の制限の中で、自らの思いなどが発信できる。それを「つぶやき」と称するのだ。そして世界中に 5500 万人以上の利用者が、毎日何かを「つぶやいて」いるらしい。そしてその「つぶやき」人口さらに増加中なのだという。

ケータイ持たずともツイッターが「社会を変える」となれば、何故そんなことに、と気になる。それで、津田大介著「Twitter 社会論」を購入することに。それによると、ツイッターは、米ツイッター社が、’06 年 7 月に始めたもので、またたくまに日本にも上陸したのだという。その使用の基本は「今現在自分が何をしているかを 140 字以内で投稿し、同じように投稿された他人の他愛ない日常を読む」ということらしい。

たとえばこんな事なのか・・・。「只今、日比谷松本楼でお昼」と誰かさんがつぶやく。するとそれを読んだ誰かが、「いいなー、ワタシコンビニのお弁当だよ～ん」と書きこみ、次から次へ誰かが反応していくというような、ケータイの小さな画面の中での名も知らぬ者同志の際限のないおしゃべり。

他愛ない。何が面白いのか。しかし次のような事例が紹介されている。「’09 年 1 月ニューヨークのハドソン河に不時着した飛行機事故の第 1 報は、iPhone からツイッタ

ーに書きこまれた“つぶやき”だったのだ。情報は瞬く間に広がり、既存メディアはそれを後追いするしかなかった。報道における速報性という重要な部分がツイッターに侵食された瞬間である。そして画像には、これがハドソン河に落ちた飛行機だ。私は今、乗客を救出しているフェリーに乗っている。信じられない！とキャプションがついていた。」というものである。

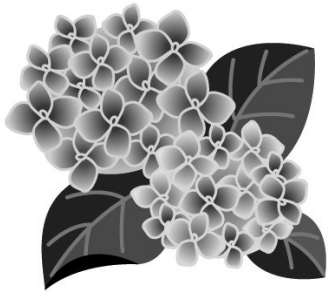
そして、またこの機能をじゅうにぶんに活用して大統領選挙を勝利したのが、オバマさんだったとも紹介されている。なるほど、こうなると「社会を変える」といえる。「つぶやき」恐るべし。日本でも政治家があちこち「つぶやき」始めている。しかし、こんなことで世論の趨勢が決まるとすれば、これは恐い。

140 字の世界。最近の毎日新聞`10 年 6 月 12 日に、こんな記事があった。―「ツイッターで論争」・東京都の猪瀬直樹副知事がツイッターで、大阪市水道局の職員の年収が 1000 万円と紹介したところ、大阪市の平松邦夫市長が「事実ではない」と直ちにツイッターで反論。8～9 日、水道を巡る「公開討論」となった。―

水道事業を巡って、2 日間の論争が、ツイッター上でなされ、それを多くの人が注視し書きこみを入れたであろうことは想像に難くない。大阪市長の反論も記しておこう。「平均は 678 万円で東京都より低い」。いずれにしても金額はともかく、事柄が裸にされてしまうのが、なんとも生々しい。

ところで、こんな話を聞いた。○月○日○時○○公園にて大縄とびをしよう！の呼びかけに、200 人が集合したのだという。不特定の人が！？本当かいな、にわかには信じられないけれど。

この伝でいけば、コンサートへの参加呼びかけにも使えそうではないか。しかし問題はその中身だ。私の場合だが、恒例の夏の平和コンサート、「一本の鉛筆があれば」、今夏はオリンピックと戦争がテーマ。そして 2020 年のオリンピックを広島に招致しよう、と呼びかける計画なのだ。ツイッター140 字で「つぶやき」、告知できるものだろうか。試しにつぶやいてみる。『』内つぶやき。



『1936 年ベルリン五輪の聖歌リレーのコースは、後の第 2 次世界大戦時、ナチス軍の侵攻の道となった。2020 年、五輪を広島に招致しよう。核廃絶の願いをも灯した聖火がリレーされる広島への道こそ、あと戻りを許さぬ平和への道になる。狭間壮平和コンサート今夏のテーマ。7 月 31 日 2 時於松本。』

以上 139 字。ホール名、料金、連絡先ともに記載ならず。もし要領よく書きこみできたとして、こういうたぐいの中身で 200 人集るだろうか。縄とびのようにはいきそうもない。されど気になる「ツイッター」のこれから。しかし始めれば私のこと、きっと過激にのめりこむだろう。様子をなが

めているほうがよさそうである。

【筆者紹介】**狭間 壮**（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

音楽時評

ＴＶの音楽録音

ＴＶは低俗ものと決めていたが、デジタル器機に替えたら、意外にクラシック音楽番組が多いことを知った。ＮＨＫのＢＳでは平日午前中、一時間近く主としてリサイタル風の番組がある。対象をどのように選ぶのか分らないが、種目が珍しいもの、管楽器、コントラバス、ギターなど、いわば風変わりな種目のものが多い。京都のお寺の庭園でバッハの無伴奏チェロ・ソナタを演奏するのもあった。会場も都心のホールではない所のものが多い。

クラシック音楽番組はほとんどがＮＨＫだが、民放にも時にオーケストラ演奏の放送がある。先日、ある民放配下のオーケストラ演奏の放送があった。どうもＮＨＫの場合と音の録り方が少し違うように聞こえた。曲はワーグナーの「トリスタン」、前奏曲と「愛の死」。外国人指揮者による演奏。聞こえる限りでは、パートの音量バランスがどうも気になる。弦の音量が全般的に小さい。この曲で弦が弱いと曲の脈絡が不明になる。写真のぴんぼけを見ているような按配である。受信機のスピーカーのせいかとも思ったが、Ｎ響の番組の時には問題がないのだから、そうとも思えない。放送局が違うのだから当然録音スタッフも違うだろう。ＮＨＫは一日の長があるのか、視聴者には分らない。民放もクラシック放送には力をいれてほしいので否定的なことは書きたくない。おおいに研鑽してほしい。だいぶ昔のことだが、フリーの録音技師がふと語った。「ＮＨＫの音は味噌汁の味だ。いまは、ほかに中華料理とかエスニック料理とかあるが、やはりＮＨＫは味噌汁だ」と。一番古い放送だから人々の耳と頭に浸透して馴れているのだろうか。ＮＨＫが味噌汁かどうか、そこまでは一般の者には判断できない。ＮＨＫもその他の放送局も、競いあっていい放送をしてほしいのが視聴者の願いである。　　（Ｉ－ｐｏｄ）

連載 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

第 10 回　音楽映画が懐かしい

「のだめカンタービレ」という作品が話題になり、テレビ・ドラマだけでなく映画にもなったらしい。音楽大学を舞台に指揮者とピアニストを目ざす若者が主人公で、それを囲む仲間やキャンパス、オーケストラなどのようすを描く、マンガが原作のユニークな作品だ。テレビで観たが、いかにも現代風で軽いなあと思いながら、近頃少ないクラシック入りが嬉しくて、印象としては悪くなかった。

それで気がついたのだが、最近は低迷していた映画界にやゝ復活の兆しが見えるのだとか。しかし音楽、とりわけクラシックをテーマにした作品というのは、どうなのだろう？「アマデウス」や「ベートーヴェン／不滅の恋」以来、大きく話題になる映画は見かけない気がするけれど、あれからもう 15 年以上も経っている。この辺でまた、クラシック・ファンを喜ばせる話題作が出てもいいのではなかろうか。

テレビが登場するまでは、パチンコと並んで“娯楽の王様”の地位にあった映画である。そのジャンルもスペクタブルから戦争、冒険、恋愛、ミュージカル、西部劇、スパイ、歴史ものなどさまざまな分野におよび、音楽ももちろん見逃せない一角を占めている。さきの 2 作以前をふり返ってみても―「オーケストラの少女」(1939、アメリカ)、「ファンタジア」(1940、アメリカ)「カーネギー・ホール」(1947、アメリカ)、「菩提樹」「野ばら」(1956～7、ドイツ)、「パリのアメリカ人」(1951、アメリカ)、「三文オペラ」(1963、ドイツ)、「未完成交響楽」(1933、オーストリア)、「別れの曲」(1935、フランス・ドイツ)、「楽聖ベートーヴェン」(1936、フランス)、「永遠の調べ／シューベルト物語」(1941、アメリカ)、「幻想交響曲」(1944、フランス)、「楽聖ショパン」(1945、アメリカ)、「アメリカ交響楽」(1945、アメリカ)、「愛の調べ」(1947、アメリカ)、「ソング・オブ・シェラザーデ」(1947、アメリカ)、「エロイカ」(1950、オーストリア)、「夜明け／ムソルグスキー物語」(1950、ソ連)、「歌劇王カルーソー」(1951、アメリカ)、「愛の交響楽／シューベルト物語」(1955、イタリア)、「わが恋は終りぬ」(1960、アメリカ)、「ソング・オブ・ノルウェー」「ウィーンの森の物語」(1964、アメリカ)、「チャイコフスキー」(1970、アメリカ・ソ連)、「恋人たちの曲」(1971、イギリス)、「愛の人フランツ・リスト」(1972、ハンガリー・ソ連) ―など、結構いろいろな作品が作られてきた。

中でも、数回にわたってリバイバルしたのは「オーケストラの少女」「未完成交響楽」「別れの曲」「ファンタジア」など。「オーケストラの少女」は、失業した音楽家の父を救おうとする少女が劇場内に忍び込んで、

練習中の名指揮者ストコフスキーに認められるようすを描いたもので、ダイアナ・ダービンという少女が歌うモーツァルトの「アレルヤ」が、じつに印象的。また「未完成交響楽」は、貧しい青年音楽家シューベルトがエステルハーツィ家の令嬢に恋して新作の交響曲を書くものの、失恋して「わが恋の終らざるごとく、この曲も終らざるべし」と曲を残す悲恋の顛末を描いたもの。なんと「未完成」の第 3 楽章が流れていた。「別れの曲」は、ワルシャワ音楽院の同窓生で恋人のコンスタンチアに見送られてパリに出たショパンが、ジョルジュ・サンドらに助けられて成功していく話。「未完成」ともども、史実とは違うフィクションである。さらに「ファンタジア」はストコフスキーとフィラデルフィア管弦楽団が演奏する 7 つの名曲に合わせて、ディズニーの精密なアニメが楽しめる家族向きの作品だ。

一方、記憶に新しい「アマデウス」(1984、アメリカ）は、嫉妬からモーツァルトを毒殺したと伝えられる宮廷楽長サリエリの告白をもとに、天才の生涯を回想していく見事な作品。1823 年頃にウィーンで流れた毒殺の噂を戯曲化（プーシキン）したものをベースにしているが、真実は違うようである。また「不滅の恋」は、ベートーヴェン研究の中でも興味深い「不滅の恋人」を、弟子のシントラーが探っていくというミステリー風の作品。現在ではほゞ2 人に絞られている候補とは別に、なんと弟の妻が恋人だったという意外な結論になっているところが面白く、晩年に見せた執拗な甥への関心が「なるほど」と肯ける、説得力あるものになっている。

ともあれ、それぞれに個性的な作曲家たちの姿が、なじみ深い名曲とともにタップリと楽しめる。クラシック好きとしては、もっともっと観たいし創られてほしいと思う。再放送の多いテレビなどは、旧作でもよいから、こうしたフィルムを積極的に取りあげ、映画館の中にも音楽映画専門というところが一つや二つはあってもいいと思う。世は今や多様化の時代。映画会社やテレビ局、映画館もそうした努力をすることこそ個性化、差別化であり、生き残りにつながる一つの道ではあるまいか。

【宮本英世氏プロフィール】1937 年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲 100 選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

音楽時評

東京の演奏会場

新宿の厚生年金ホールが閉鎖された。とり壊されて新しいものが建つのだろう。

新宿文化センターには大小ホールがあるが、近頃は余り利用されない。もともと位置が不便だった。駅から遠いし小ホールは音響も不評だった。そうなると新宿にはいいホールがない。初台のオペラシティに大ホールとリサイタル・ホールがあるが、新宿から一駅離れている。西側に住む人にはいいが、そうでない人にとってはこの一駅がわずらわしい。小ホールとしては角筈区民センターがあったが、少し前使用料を値上げした。そのほかも、ある時に各ホールが一斉に値上げした。市ヶ谷のルーテルセンターも値上げした。いまよく使われるのは錦糸町のすみだトリフォニーである。一斉値上げの時、忘れたのか値上げに同調しなかった。ここも大小あり、大の方は新日フィルが根城にしている。小ホールの方も音響はまずまずで、ただ、場所が東側で西に住む人にとってはいささか不便であることは否めない。位置が公平であるためには山手線の内側ということになるのだろう。紀尾井ホールは上等だが使用料が高い。トッパンも駅から不便。サントリーは大ホールの方は最良の評価のものだが、小ホールはいささか付随物的である。上野の東京文化会館ホールは大小とも上等だが、なんとしても東に偏っている。朝日浜離宮は地下鉄が前まで来たので位置はよくなった。いまや新都心となった新宿にいいホールがないことが残念である。

再生音楽が普及発達してもやはりライヴ演奏会はなくならない。音楽は音だけを聞くものではない。ライヴ演奏の会場では多種多様、多岐大量の情報が飛びかう。これらの情報を再生用に取り込むことは不可能である。音だけに限っても本当にすべてのパラメーターを収録できているものか。自然は常に人を超えている。演奏会場は永遠に音楽伝達の場であり続けるだろう。

だいぶ以前のこと、ドイツの放送局が「ベルリンは音楽のメトロポリスか」という特別番組を放送した。演奏家、作曲家、評論家、等々、いろいろな人が取材に答えた。その中で、作曲家のイサン・ユンの談、「私の比較的重要な作品がベルリンで初演されたことがある。もしもこれがロンドンであったら、もっと広く知られたであろう」。広く知られるというのは「verbreitet」という言葉だったから、本来「広がる」という意味だが、これは事前の評判と事後の評判がひろがるということ等々、広範囲の意味を含むのだろうが、ベルリンはロンドンより広報効果が劣るということだろう。広報という意味では東京は世界の音楽メトロポリスの一つになった。それは一面的で軽い商業的な意味だ。帰りに食事もできない異様な音楽メトロポリスだ。（快聴音）

連載

読 む 音 楽

詩になった名曲たち
(29)

作詩：桐山 健一

作家、桐山健一さんは、15年ほど前から、生の演奏会を聴いているとき心に降りてきた言葉を詩に書き溜めてきたそうです。詩から生まれた音楽は多いですが、音楽から生まれた詩は珍しいのではないでしょうか。
【著者：桐山健一（きりやま けんいち)】1942年、京都生まれ。早稲田大学第1文学部卒業。1994年、コスモス文学出版文化賞受賞。日本PENクラブ、および日本詩人クラブ会員。

幻想序曲「ロメオとジュリエット」

幻想的な仮面舞踏会
愛の神はロメオとジュリエットを
運命の糸で引き合わせる
短い愛の一時

愛を引き裂く
悪魔のしわざ
憎しみと恐怖の別れ

ロメオとジュリエットの
心の隙間に生じる
悪魔たちのささやき
愛を信じるゆえの
愛の行き違い

人間のおろかな感情は
愛を引き裂く
ロメオを愛するとは
ジュリエットの永遠の愛とは

錯綜(さくそう)する心
悪魔のささやきは
心を疑心暗鬼（ぎしんあんき）させ
心は荒廃し絶望の霧がたちこめる

二人の愛を信じる心はこの世の死を経て
愛の希望
愛の光
愛の絆
を生じる

ロメオとジュリエットの
清らかな死顔は
人々の心に愛の泉を
彷彿（ほうふつ）させる

《６月号の訂正》

本誌2010年６発号の掲載記事に、以下の誤りがありましたので、訂正させていただくとともに、お詫び申し上げます。

◆５ページ　20行目
　　市川亀次郎（誤）　→　市川亀治郎（正）
◆20ページ　9行目　記事タイトル
　　新編集長からのご挨拶（誤）→新副編集長からのご挨拶（正）
◆21ページ　最後の行
　　（きつかわ・みがく　本会　機関誌編集部長・副編集長）（誤）
　　↓
　　（きつかわ・みがく　本会　機関誌出版部長・副編集長）（正）

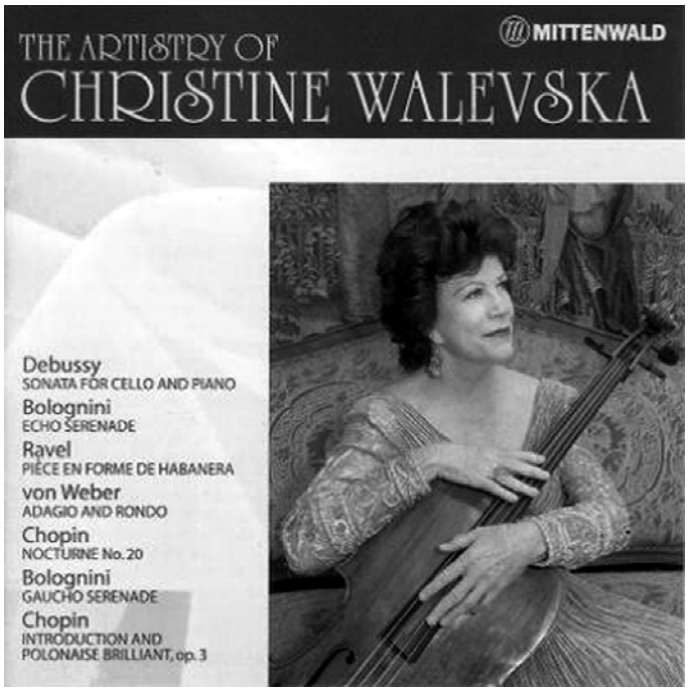
【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

第 15 回
クリスティーヌ・ワレフスカとの再会

1960 年代、チェロに 3 人の美人女性奏者が相次いで登場した。ドイツのアニア・タウアー（1945～73）、イギリスのジャクリーヌ・デュ・プレ（1945～87）、そしてアメリカのクリスティーヌ・ワレフスカ（1944～　）である。ところが、タウアーは 28 歳で自殺、デュ・プレは多発性硬化症を発症して 73 年に引退を余儀なくされた。ワレフスカも 70 年代に 6 枚のＬＰを録音し、74 年に初来日を果たしたあと、全く消息を聞かなくなってしまった。私はプロコフィエフとハチャトリアンの協奏曲を収めたＬＰでの力強い技巧と鋭い感性、朗々と鳴る美しい音に魅せられ、これほどの人がなぜ埋もれてしまったのか不思議に思っていた。



今年になり、この幻のチェロ奏者が来日公演を行うというニュースに接し心底驚かされた。結婚のため 80 年代からアルゼンチンに住み、中南米を中心に演奏活動を行っていた彼女。2007 年 12 月、カリフォルニアで開いたリサイタルをたまたま聴いた日本人が彼女の演奏に感激し、個人招聘を思い立って今回の来日公演が実現したという。

私は 6 月 5 日、石橋メモリアルホールで催されたリサイタルを聴いた。舞台に出てきた彼女は非常に大柄で、チェロを楽々と操作する。長い指が大きなヴィブラートを生み、長い腕が大らかなフレージングを生んでいるのを目の当たりにし、彼女の美しく豊かな音の理由が 1740 年製ベルゴンツィという名器ばかりでなく、恵

まれた身体と抜群の技巧との融合であることが直感されたのだった。

プログラムではショパンやブラームスのソナタでの渋みのある演奏も良かったが、伝説的なチェロの名手ボロニーニ（1893～1979）が彼女に楽譜を託した無伴奏曲、エコー・セレナーデが抜群だった。両手のピチカート、コル・レーニョ、フラジョレット、ダブル・ストッピングなどを駆使したスペイン情緒あふれる 4 分ほどの難曲を、彼女は鮮やかな技巧で弾き切って聴衆の大喝采を呼んでいた。

①プロコフィエフ：チェロ協奏曲第 1 番、ハチャトリアン：チェロ協奏曲
　クリスティーヌ・ワレフスカ（チェロ）
　エリアフ・インバル指揮モンテカルロ国立歌劇場管弦楽団
フィリップス　SFX8674［LP・廃盤］
　1972 年 10 月、モンテカルロでの録音。日本では 1974 年の来日記念盤として発売された。プロコフィエフの第 1 番の録音は珍しく、リサタル終了後の彼女にそのことを質問すると「大変な難曲で、この録音以来弾いたことがない。2 度と再現できない。」と話していた。

②クリスティーヌ・ワレフスカの芸術［ドビュッシー：チェロ・ソナタ、ボロニーニ：エコー・セレナーデ、ガウチョ・セレナーデ、ラヴェル：ハバネラ形式の小品、ウェーバー：アダージョとロンド、ショパン：ノクターン第 20 番、序奏と華麗なるポロネーズ］
　クリスティーヌ・ワレフスカ（チェロ）
　ブルース・ガストン（ピアノ）
ミッテンヴァルト　MTWD99044［CD］
　1967 年、カリフォルニアでの録音。今回の来日に合わせて CD 化されたもの。文中に触れたボロニーニのエコー・セレナーデが素晴らしい演奏で収録されている。LP レコードからの復刻だが、音質はたいへん良い。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。クラシック担当を 10 年務め、5 年間の本社勤務を経て、現在 HMV 渋谷、クラシック売場勤務。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

遙かなる旅路　　ピアニスト　滝澤三枝子

「アメリカの事」

2009 年秋、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスと、隣国ウルグアイの首都モンテビデオでリサイタルを行った。両国とも日本の裏側にあり遠いというイメージが、演奏に堪えられる体力と重なり合う。今までリサイタルを行ったカナダ、合衆国、中国、香港、メキシコ、グァテマラ、イスラエル、オランダ、スペインと、今回の南米、あとアフリカが含まれれば、世界一周音楽の旅になる。この大仕事を終えれば、一生の思い出となるに違いない。などと、自分を励まし、ダラス乗り換え、21 時間の旅が始まった。車窓から見えるブエノスアイレスの街並みは、南米唯一の大国の風格がある。スペイン栄華の名残の重厚な古いビル、それが不思議とモダンに写る。リサイタルの会場は「インマクラーダ・コンセプションホール」550 名収容。主催は「セントロ日系アルヘンティーノ」。コンサートは暖かい拍手で迎えられた。日系の人達のこれまでに経験した事のない優しさは、人間の深い愛といえる。

日系人は沖縄出身が多い。無からの外地での生活にお互い寄り添い、ご苦労を凌いでこられたからこそ、真の優しさをもっているに違いない。我慢強く、優しいこの姿は日本人の本来の国民性。戦後、日本は頑張って働いてきた。しかし今、持っていた日本人の優しさが欠けてきたように見える。日本人である誇りと歩んできたありのままの姿を、子供、若い世代に伝えていこう。

滞在中、民族音楽やあこがれの本場アルゼンチンタンゴの鑑賞。アルゼンチン料理の牛肉、豆の煮込み料理をワイン付きで賞味した。コンサート終了後には歓迎夕食会と、夜半１時、２時まで楽しむ。日系人の方々の持て成しは時間の流れを感じさせない社交的で明るいものだった。街並みに紫の花を咲かせるジャッカルの大木は、映画のワンシーンを見る様に芸術的で、アルゼンチンの歴史とともに誇らしげだ。

ブエノスアイレスより 40 分の飛行でモンテビデオに到着。都心から 15 分も車で走ると風景は一変して大草原になり、牛肉と皮製品の牧畜の国。アメリカでは、自国の牛肉を輸出し、ウルグアイの牛肉を輸入し食すると聞いた。私も牛肉を賞味した。

ウルグアイの人口は約 331 万人。特にスペイン、イタリアからの移住者の子孫に

より形成されている。先住民系、アフリカ系の人達も生活している。地震のない温暖な気候、緑豊かな自然、味と質の良いミネラルウォーター、豊富な食物と恵まれた国としてバカンスを楽しむ人達。そして移住者が増えつつある。

モンテビデオ・リサイタルの主催は「ウルグアイ在日本大使館」。会場は、クラシックで素敵な建物、国立放送局ソドレ劇場、500 名収容。15 年前にマドリードでコンサートを行った時からの旧知の友人であります、竹本正美大使より「練習を心おきなくなさってください」とご配慮賜り、公邸に宿泊しておりました。

大使館の若い女性は、遠い日本に思いを寄せたのだろう。私を母親のように接してくださった。暖かい思い出となっています。コンサートは、開演前より熱気を感じた。拍手が鳴り止まず、スペイン語でオトロ、オトロと声がかかる。アンコールと同じ意味です。スタインウェイフルコンサートの名器を、私は響き鳴らした。ロビーでは、在日本人や聴衆から祝辞、励ましをいただいた。心から嬉しい。

ウルグアイは、数々の芸術家を世界に送り出している。音楽に関しては「カンドベ」「ムルガ」「タンゴ」などがよく知られている。野外劇場で毎年開かれている、国際ロックフェスティバルに、10 万人以上が集まる。しかしながら、40 数年前の政権では芸術家の創造活動を抑制した時代もあった。1865 年落成のウルグアイ文化の象徴である優雅なソリス劇場では、バレエ、ジャズ、演劇、演奏会が行われ、楽しみに集まってくる人びとの賑わう広場での光景が浮かぶ、幸福な姿です。ソリス劇場での 150 年の歴史によって培われたウルグアイ人の芸術への熱い思いは、私のコンサートでの真の楽しみを知っている聴衆の熱い拍手と通じる。

長い旅路の地は、心の豊かな素晴らしい国でした。大迫力のイグァスの滝を同行の臼井菜穂子さんと観光。原住民が作った素朴な小鳥の置物を土産にした帰路は、気流の関係で 25 時間の長い飛行だった。

「帰国して」

ウルグアイでの小学校の音楽授業は、特に音楽室がなくサロンや廊下で床にすわり勉強する。何十年も調律されないままのピアノを使用して、子供向けの歌が少なく小学生に大人の歌を唄わせるという。そして教師が不足している。

私たちは恵まれた国にいる事を忘れている。見て、聞いて、自分の五感で物を受け止める感性には、美術、音楽の教育が不可欠と思う。芸術は自由を知り、心を広くする力を与えてくれる。芸術は本来、自分の内面に求めていくものだが、10 カ国 20 都市に滞在し、世界にはいろいろな国があり、国が違えば人達もさまざまだと

感じた。日本の良さを知り、日本人として誇りを持つ様になった。素敵な出会いがあり、感性で受け止めた思いは音楽に着実に反映しているし、音楽を追究していく支えになっている。

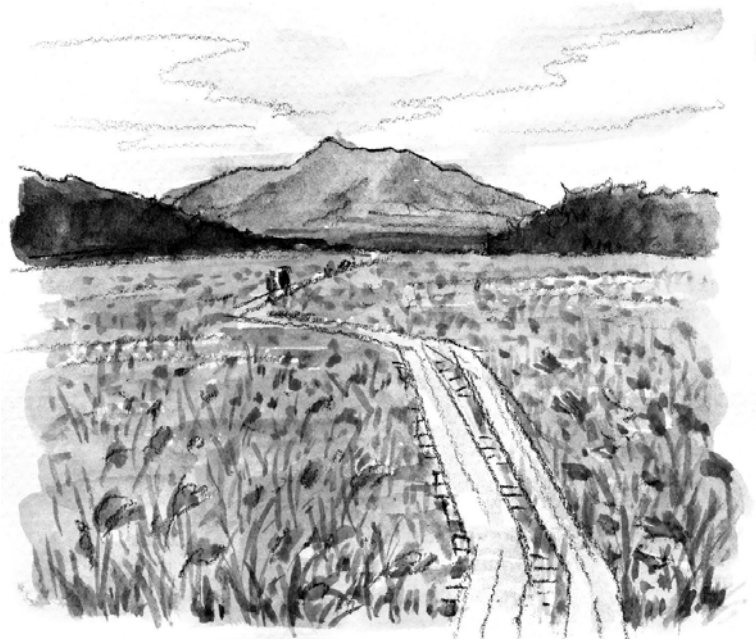
2001 年のイスラエル公演 1 ヶ月前に、スーパータクシーバスの爆破事件を報道で知った時、ゾーッとする様な怖さを感じた。今回の遠い国への南米公演では体調の不安が頭を過る。

遠い国の、会ったことのない人達が私のコンサートを楽しみに待っていると思うと、自然に勇気が出てくる。音楽の力がそうさせるのでしょう。聴衆と演奏家がコンサートという一瞬の場で、音楽の素晴らしさを共有でき、次の知らない国へのコンサートを夢見ながら、帰国後の心は清清しい。「選ばれた人は人々の為に音楽をやらされているのです」という、ウルグアイ在日本大使館竹本正美大使のお言葉を有難く、励みにしていきたいと思っている。

日本では今までに 100 回ほど、病院、介護、福祉施設で奉仕活動を行った。更に広く目を向けて、アジアの恵まれない子供達に演奏会を行う目標を持っている。子供達の輝く瞳は平和の象徴。又、海外の人材育成に携わりたく退職し、第 2 ステージの人生の機会に模索しているこの頃です。

2009 年 12 月　　常盤台にて

（たきざわ・みえこ　本会ピアノ会員）



（社）日本歌曲振興会の「第５回 邦楽器とともに」に参加して

作曲　高橋　通

●（社）日本歌曲振興会の始まりは四家文子（1906～1981）という歌手がいたが、日本語の歌曲をどう歌ったら良いか、良い日本語の歌を作ろう、という考えではじめた「波の会」（昭和４１年発足）が源になっている。その後、四家の死、法人化などの変遷を経て、現在の組織になった（正確には同会の HP＜http://www.nihon-kakyoku.or.jp/＞を参照）。
会員は、例外もあるが、歌い手、詩人、作曲家から構成されている。他に、名誉会員と呼ばれる邦楽器の演奏家などもいる。
この会で、特に重視されているのは、『美しい日本語』ということであり、特筆すべきは、アクセントの問題である。作曲家には、正しい日本語のアクセントに沿った節作りが求められている。

●「邦楽器とともに」は＜新しい日本歌曲の夕べ、新作歌曲を揃えて＞という副題がついているが、今年で第５回目となる比較的新しい事業である。参加は、詩人、作曲家、歌い手のうち２名が会員であること、が条件である。
第１回当時には、邦楽器以外の使用は禁じられていたが、現在ではピアノ以外の西洋楽器の使用は認められている。

●第４回の出品曲名と編成を挙げておくと（プログラム順）、「冬の雅歌」（琵琶、横笛、チェロ、歌）、「花いかだ」（笙、箏、歌）、「かがやく季節に」（箏２面、尺八、歌）、「モノオペラ＜与吉のオラショ＞」（箏、十七絃、笛、囃子、歌）、「春の日に」「野の花」（箏、太鼓＜プク＞、木鉦、歌）、「春愁」（笙、十七絃、歌）、「恋の堅田」（細棹三味線、中棹三味線、篠笛・能管、歌）、「春の宵」（尺八、箏、打物、歌）という８曲。
今回（第５回）、「父さんの笛」（箏、篠笛・能管、歌）、「記憶」「水の音」（笛、二十絃箏、歌）、「夢の道」（フルート、箏、打物、歌）、「アダジオ」（箏二面、歌）、「俵あむ母」（箏二面、尺八、歌）、「波間に消えた恋」（箏・胡弓、十七絃、歌）、「命」「風の眼」「ばら園」（フルート、二十絃箏、歌）、「遥かなる愛」（尺八、箏、打物、歌）の８曲。
さて、このように多種多様な作品が並ぶ理由は何であろうか。
会を始めたコンセプトが、単に＜邦楽器を伴奏にした日本語の歌（曲）を＞という、単純な発想だったからに違いない。何を求めているのかが明確でないが、そういう曖昧さが、多様な曲の参加となって、面白さも出てきている。実際並んだ曲には、邦楽器＝箏で陰旋法の枠しか考えない作品、宮城道雄時代の新日本音楽に類する作品、構えだけは立派だが、

邦楽器を使う意味の見えていない作品、音響と効果だけで出来上がっている作品、など様々であった。

●邦楽器を使った作品を創作する意味は何処にあるのだろうか。

邦楽器でも、いろいろな西洋的、合理的な仕掛けを施せば、西洋楽器と同様な機能性を発揮できることは、明らかである。明治の文明開化によって影響を受けた例を示せば、尺八にフルートのようなキーを付けたオークラウロという楽器が在ったことをご存知の方も多かろう。今は楽器博物館に出かけてもなかなか見かけることはできない。指穴を半分閉じたり、息の吹き込み角度を変えながら、音程の変化を出し、音に表情をつける尺八の面白さに取って代わることができなかった。宮城道雄が八十絃もある箏を作って弾いたこともある。楽器は空襲で焼失してしまったが、いまだに再現されていない。反対に十七本の絃を持つ楽器が、古典邦楽も守備範囲に入れているグループにさえ使われ、１世紀近くになっても、いまだに存在し続けるのはなぜだろうか。二十絃と呼ばれる楽器があるが、弦の数は２１本であったり２５本であったりする。この楽器は、伝統的な１３弦の箏の音色を持ち、西洋音楽を作るのに必要な音の数を補うために作り出された楽器で、かなりの支持を得ているが、伝統音楽とは程遠い存在であり、伝統邦楽的とは言い難い。この楽器にとって幸いなことは、有名無名の作曲家が、ポップスを含め、この楽器のための作品を数多く提供していることであろう。

作曲の具体的な例で述べると、古典邦楽における箏の音は、一つの絃を弾いただけの単音であっても、西洋のピアノで弾く和音と同等以上の表現力、音の力を持っている。邦楽系の作曲家の作品に多い傾向なのだが、不必要に、かつ唐突に、いわゆる三和音が聞こえる作品を耳にする。西洋古典クラシック音楽の象徴であるような三和音が必要なのであろうか。邦楽器の生み出す音の持つ効果や変わった技巧による音響（騒音を含め）だけを利用したものもある。邦楽器を使う意味をはっきりさせている点では分かりやすいが、好感が持てない。

日本語の歌曲と言う点から考えると、発声の問題を無視することは出来ないが、ほとんどの作品は、西洋音楽的な発声であるベルカント唱法を基礎にした発声しか念頭にない作品である。この点は今後の課題として考えるべきことと思われる。

観客と後援について考えてみるのも面白い。一般のコンサートはもちろん、(社)日本歌曲振興会の主催する他のコンサートと観客が大きく違っているのは、いわゆる邦楽関係者がかなり多いことである。当然と言えば当然であるだろうが、演奏家の関係の他、邦楽の世界で活動している作曲家の作品も演奏されるからである。第４回では常盤津文字兵衛という伝統的な名跡を受け継いでいる作曲家の作品もあった。

この会の後援者として、(社)日本作曲家協会、日本現代音楽協会、邦楽ジャーナルという

３つが並んでいることも興味深い。

●最後に、私が参加した理由を述べておく。私が、第４回に参加しようかどうか迷っていた時に、友人が言ったこと、「邦楽と洋楽の中間のような音楽」があったのだそうだ。彼は、作曲家や演奏家ではないが、非常に沢山の音楽、ジャズ、クラシック、邦楽などあらゆるジャンルの音を真剣に聴いている人で、表現法方は素人的ではあるが、いわゆる耳は肥えている人である。録音を聴いて、彼の言葉を思い出したとき「言い得て妙」と思った。

（たかはし・とおる　本会　作曲会員）

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

邦楽器と歌曲、可能性の響き

～第５回『邦楽器とともに』に参加して～　　作曲　橘川　琢

去る平成 22 年５月 18 日、すみだトリフォニーホールで行われた社団法人日本歌曲振興会主催　第五回「邦楽器と共に」のコンサート。この演奏会は社団法人日本歌曲振興会に所属する詩人・演奏家（歌）・作曲家による「歌」と「邦楽器」、この組み合わせによる歌曲によって構成されている。「歌曲」の枠と可能性の拡がりを意欲的に求めていると感じさせる会で、参加された日本歌曲振興会の歌い手はもちろん、邦楽器演奏家も古典の名手から現代邦楽の最前線の方々まで集い、運動体としての冷静な熱気を感じた。

今回色々とご縁がつながり、会員ではないが私も作曲家として参加させていただく機会に恵まれた。この大変貴重な体験をコンサート・レポートとして、作曲上の視座からいくつか記してみたいと思う。今後、このような形式で作品を作曲される方や演奏される方の踏み台的役割にしていただければ幸いである。

今回「歌曲」を作曲する意識ではあったが、歌としての呼吸や心臓の鼓動である「拍」、そして「間」、その自然な共存ができるにはどうすればいいか終始考えさせられた。歌曲である以上歌として言葉と意味を届けることを第一とするが、今回は詩の中で「歌」として伝えたいところ、一種「語り」として伝えたいところを感じ取り、それに応じて作曲の書法上、拍節や音価に自由性を持たせ、「間」がより存在しやすくなるようにした。具体的には拍節を無くすα小節の挿入や、音符の符尾を消し不定量化すること、グラフィックも必要分用いて視覚的かつ感覚的に音の長さの関係がつかめるようにすることなどである。

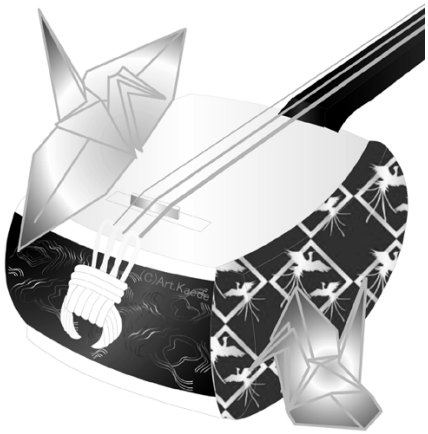
ベルカント唱法を中心とした歌唱方法と邦楽器に関しては、音楽的な「相性」や「融合」を問う形ではなく、そのまま活かしつつ音楽上のそれぞれのメッセージ性や存在価について気を配った。今回の拙作の場合、直接言葉を伝えるバリトンが主になることは自然ではあるが、篠笛（能管）、箏も「伴奏」だけではなく、その音の美しさに焦点を当て、ときに詩から出てきたそれぞれ人格の在る旋律的・音色的登場人物として独立した一個人として詩の物語を語るメッセージを発せられないだろうかと考えた。実際、音楽の上では歌や言葉の陰・背景に徹する事も多いが、時に人格を持ちバリトンと対位法的関係になり、また詩の場面そのものや象徴、詩に隠された（時に明示された）情になろうとした。

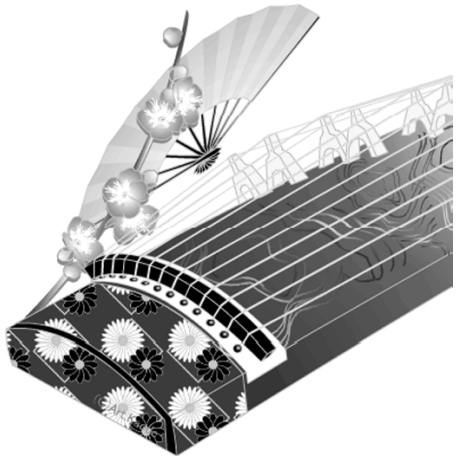
先の「拍」と「間」による拍節の自由性と、この横の線における尽きぬ多層的対話関係を構築した結果きわめて物語性の強い歌曲になり、実際当日の感想として、歌曲としての存在感以上に、詩を元にした世界の現出そのものへの興味の声がいくつか寄せられた。それが邦楽器が入ったがゆえに生まれた結果か、詩がそのような広がりを内包していたのか、作曲者の音楽的志向によるものか、そして「歌曲」の枠と可能性の拡がりを持つものなのか、今後実作を通じてさらに探求してゆきたいと思う。

最後に、演奏家の皆様、関係者の皆様、そして外部からの参加者であった私に不安を感じさせぬよう、細部にわたり気を配って下さいましたプロデューサーの森田澄夫氏に心からの感謝の気持ちをお伝えしてこの小文を閉じたい。

中島登詩集『遙かなる王國へ』より「記憶」「水の音」
詩：中島 登（日本歌曲振興会）、作曲：橘川 琢、バリトン：鴨川太郎（日本歌曲振興会）、笛（能管・篠笛）：西川浩平、箏：藤川いずみ

（きつかわ・みがく　本誌　副編集長）





ＣＭＤＪ　会と会員の情報

１．会と会員のスケジュール

７　月

２日(金) 第23回ピアノ部会主催公演　　“ショパンに魅せられて”
【オペラシティ・リサイタルホール18：45開演　一般前売3,000円 当日3,500円】

３日(土) 声楽部会主催公演 「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート～月によせて～」
【すみだトリフォニー小ホール14：00開演（13：30開場）】

４日(日) 助川敏弥－邦楽合奏と男声合唱とオーケストラのための「梵」／大月宗明作曲・助川敏弥編作【港区メルパルクホール 13:00 開演】問合せ：03-3433-8337

４日(日) 芝田貞子「詩と音楽の結晶　ドイツ歌曲コンサート」
シューベルト：楽に寄す・鱒、メンデルスゾーン：歌の翼に 他
【かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホール14：00～ 前売：3,500円当日：4,000円　チケット販売：シンフォニーヒルズ　チケットセンター　TEL03-5670-2233】

４日(日) ピアノ研究会“翔”定期演奏会
【浜離宮朝日ホール13：30開演　3,000円 問合わせ：大山　TEL 044-966-5224】

７日(水) 定例理事会【事務所　19：00～】

19日(土) 深沢亮子－中村静香さんとのDuo ＆ソロ コンサート　主催：FSS（フランツ･シューベルト･ソサエティー)【日生劇場　ロビーコンサート　14:00～】

19日(月・祭) 助川敏弥－歌曲集「薔薇の町」(2009)、ほかピアノ曲
北海道立南高等学校同窓会記念行事・ソプラノ・高橋照美・ピアノ・上杉春雄　【札幌市モエレ公園ガラスのピラミッドホール　17:00開演】

21日(水) 北川靖子・北川暁子　ソナタの夕べ
シューベルト:ソナチネNr.１・３、 ベートーヴェン:ソナタNr.9
クロイツェル、R.シュトラウス:ソナタ【東京文化会館小ホール19:00～】

25日(日) 理事長主催：「若い会員との懇談会」
【日本音楽舞踊会議事務所18:00より軽食付、会費1,000円】
昨年好評の会を今年も開きます会員の皆様もどうぞご参加ください

31日 (土) 日本音楽舞踊会議 臨時総会
【としま生活産業プラザ 第一会議室 pm13:30～16:30】

８　月

７日(土) 橘川 琢作曲「橘川 琢作品個展Ⅳ 2010 夏の國」曲：橘川 琢　詩歌曲「夏の國」ほか【西荻窪スタジオベルカント　18:00開演　前売3,000円】

７日(土)　定例理事会【事務所　19：00～】

9　月

7 日(火)　定例理事会【事務所　19：00～】

22 日(水) CMDJ 2010 オペラコンサート　『音楽と笑い』～喜歌劇を中心に～
【すみだトリフォニー小ホール　18:30～】

26 日(日)ピアノ部会試演会【新井宅 10：00～12：00】

30 日(木) 深沢亮子リサイタルー　シューベルトの夕べ　恵藤久美子さん（ヴァイオリン）、堤剛さん(チェロ)をお迎えして【紀尾井ホール 19:00 ～】

１０月

7 日(木)　定例理事会【事務所　19：00～】

9 日(土) 深沢亮子 ― コンサート【東金文化会館　14:00 ～】主催：東金文化会館

3 日(日) 広瀬美紀子ピアノリサイタル【白寿ホール　14:00 ～券：3500 円】
曲：助川敏弥「友禅」…初演、北條直彦委嘱編曲=ピアソラ「天使のタンゴ組曲」「アディオスノニーノ」、他／後援：日本音楽舞踊会議

18 日(月) ２０世紀の以降の音楽とその潮流－様々な音楽の風景Ⅶ－【すみだトリフォニ小ホール】（詳細未定）

24 日(日)ピアノ部会　試演会【新井宅　10：00～12：00】

30 日(土) 深沢亮子 ― 中村静香さんと(violin)　【朝日カルチャーセンター13:00～14:30】

１１月

4 日(木) 声楽部会公演・ピアノ部会共催　～ショパン・シューマン生誕２００年記念歌曲とピアノの夕べ～（仮称）【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

8 日(月)　定例理事会【事務所　19：00～】

15 日(月) ピアノ研究会“翔”　深沢亮子　公開レッスン
【コトブキ D.I.センター 10:00 ～13:00】

19 日(金)「第３回フランス歌曲・研究コンサート」【中目黒ＧＴプラザホール開演 19:00】(詳細未定)

25 日(木) 上野優子ピアノリサイタル シリーズ Vol.1 バーバー：ソナタ第 1 番作品 26 ほか【カワイ表参道コンサートサロンパウゼ、19 時、一般 3000 円】

１２月

2 日(木) CMDJ 若い翼によるコンサート３【すみだトリフォニー小ホール　19：00 開演】（詳細未定）出演者募集中

3 日(金) 深沢亮子　日墺協会　クリスマス会　Schubert ピアノ５重奏曲「鱒」他
出演：深沢亮子と若手ソリスト達【ホテル・オークラ　18:00～予定】

7 日(火)　定例理事会【事務所　19：00～】

15 日(水) 深沢亮子－２台ピアノのコンサート　野原みどりさんと
主催：モーツァルト協会　【東京文化会館　18:45～】

20 日(月) 日本音楽舞踊会議主催：ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ
出演：深沢亮子、恵藤久美子、安田謙一郎

曲：モーツァルト：トリオ第２番 K496　他【音楽の友ホール】

２０１１年

１　月

7 日(金)　定例理事会【事務所　19：00～】

10 日（月・祝）声楽部会主催公演「2011 年新春に歌う」（仮称）（詳細未定）
【すみだトリフォニー小ホール（昼間公演）】

４　月

８日（金）フレッシュコンサート２０１１【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

５　月

11 日（水）作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

会員・賛助会員の皆様へお知らせとお願い

○上記スケジュール記載の本会主催事業(ゴシック文字)には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

○毎号掲載されるこの欄に皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせいただく際は、①○月○日(曜日)②会員名　③催し物(出版物名)④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ　⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

２．臨時総会　開催

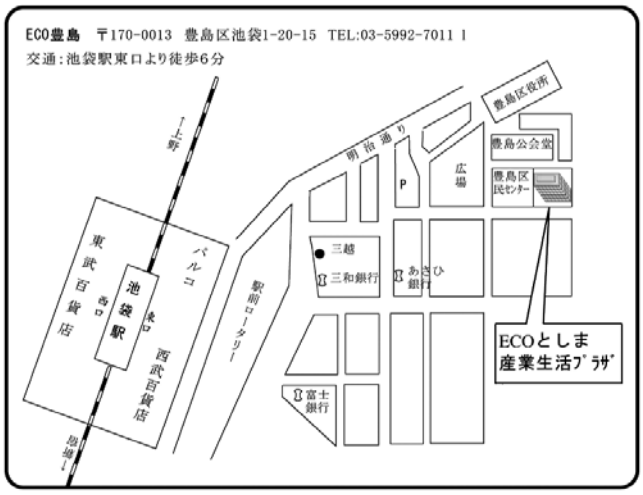
２月の定期総会で保留となった予算案などの審議のため下記の通り臨時総会を開催します。（出席可能者は、正会員、青年会員、特別会員に限ります。）

記

日本音楽舞踊会議　臨時総会

日時：平成 22 年 7 月 31 日（土）
13:30～16:30

場所：としま生活産業プラザ（ECO としま）
第一会議室（７F）　【右図】



編集後記

今月号の特集【政治・社会と文化】では、本誌としては珍しく日本文化に触れた記事が多かった。文化シンポジウム『近代西洋史と音楽家たち』をシリーズで開催する理由は、単に過去の西洋史と文化を解明して行くことだけが目的ではなく、過去を知ることにより、そこから今生きている我々の時代をより深く知るヒントを得たいという思いが根底にあるからである。そのためには、すでに我々の中に根付いて来ている西洋文化と、心の奥底に生き続けている日本文化の両方を見つめ直す必要があろう。

今月号も、今を見つめ直す小さな手懸かりとなってくれることを願って、４本の小文章を「時評」としいう形式で掲載した。その中の、時評【世の中に正義満ちる？】の文中に引用されている「人間一番容易なことは他人を責めること。一番難しいことは自分を知ること」というソクラテスの言葉は、各々の人間が改めてじっくり噛みしめてみる必要があるのではなかろうか。　　（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	ミュージックトレード社	03-3251-7491
	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	星野書店	052-961-2526
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橘川 琢
編集ｽﾀｯﾌ：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　高島和義　高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦　湯浅玲子

音楽の世界　７月号(通巻 520 号)

2010 年７月１日発行　　定価 500 円(本体 476 円)

発行人：芙二　三枝子

編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169－0075 東京都新宿区高田馬場４－１－６　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496

HP：http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471

購読料　年間：5000 円　(６ヶ月：2500 円)　振替 00110－４－65140（日本音楽舞踊会議）

＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします。